

【10】 結語

以上原始仏教聖典を中心に、ジャイナ教聖典やヒンドゥー教の法典類を参考に、遍歴と、僧院の建設と、サンガの形成について調査してきた。この結論を簡単にとりまとめ、結びに代えたい。

- (1) 原始仏教の散文聖典においては、釈尊自身も仏弟子たちも、初期・後期の時代には関係なく、ただ一人の行方定めぬ一処不住の長期にわたる「遍歴」を行っていたという証拠は見いだせない。
- (2) ただし釈尊自身も仏弟子たちも、目的と目的地を持ち、できればきちんとした宿泊場所が得られることが望ましい、長くとも2ヶ月を越えないような「遊行」は行っていた。従来の学会では、上記のような「遍歴」と「遊行」の違いが十分に認識されることなく、混同されていた可能性があるのをこれを注意しなければならない。
- (3) しかしながら偈頌經典には、「遍歴」が奨励され、実際に「遍歴」していた仏教の修行者が存在したとされている。したがって仏教の修行者の中にも「遍歴」修行を行った者が存在したのであろう。しかしながらそれをもって最初期の仏教修行者がすべからくそうであったとすることはできない。そのような修行者はむしろ特殊な修行者であって、時期的にいえば確かに最初期にはそのような修行者の割合が高かったかもしれないが、しかし後期にも存在しなかったというわけではない。
- (4) また確かに僧院が建設されるまでの最初期の仏教の修行者たちは、阿蘭若処・樹下・山中・洞窟・山洞・塚間・山林・露地・藁積などを臥坐所としていた。しかし彼らは一処不住の遍歴をしていたのではなく、それらは定住的な住処であったのであって、日々そこから町や村に乞食に出てきていた。しかしながらジャイナ教の修行者たちが求めた仮のねぐらは、作業場、集会所、水を置く小屋、市場、工場、藁小屋、旅行者のための家、庭園、墓地、空き家、木の根元などであって、これは一処不住の遍歴のために求められたものであった。
- (5) 釈尊のよって立つ立場は中道であって、遍歴は苦行として否定される修行のあり方であった。また仏教のめざす悟りは智慧を完成させるためであって、そのためには禅定することが必要であり、また禅定のためには生活の安定が必要であって、遍歴は必ずしもそれに資すものではなかった。したがって「遍歴」は頭陀行と同様に、あるいは頭陀行には遍歴の要素は含まれないから、頭陀行よりもより特殊なものとして、もし欲するならば行ってもよいという程度の位置づけであった。
- (6) またジャイナ教の修行者や、釈尊当時現れ始めていたバラモン教を基盤とする遍歴修行者も、確かに仏教においてよりは一般化されていたであろうが、一般に認識されているほど「遍歴」を行うことが常態ではなかったことは、それらの聖典自身においても推測されるところであって、原始仏教聖典からそのような姿は何えないのはその実態を表している可能性がある。
- (7) したがって釈尊在世時代の最初期の仏教の修行者は、沙門と呼ばれるジャイナ教などの他の宗教の修行者と同様に遍歴を行っていたとする認識は誤りであって、だから精舎が建設されるとともに定住が始まり、そこにおける定住的な集団生活がもとなっ

てサンガが形成されたという通説は、その事実認識に誤りがあるといわなければならない。

- (8) 事実としては、仏教の修行者は最初から樹下や草庵などにおいて定住的な生活を行っていたのであり、釈尊が各地で三帰依具足戒によって仏弟子が自らの弟子を取ることが許されることによってサンガの祖型が形成され、十衆白四羯磨具足戒が制定されることによって正式なサンガが成立することになった。この「仏弟子たちを上首とするサンガ」は組織的な集団であって、この集団の運営に関する基本原則は会議によってその意思を決定するというところにあり、その会議はきちんとした規則にしたがってなされた。また各地に散在する「仏弟子たちのサンガ」を「釈尊のサンガ」として統一するためには、日常的に改廃されるそれら規則を共有することが必要であり、そのために布薩や雨安居や遊行などが成文化化ないしは慣習法化された。これらは集団生活をする施設を要請したから、ここに僧院が建設されることになった。確かに最初期の仏教は多くの側面において他の沙門宗教と共通するものを有していたが、しかし遍歴を第一義としないことや、サンガの形成や、僧院の建設はすべて釈尊の成道において確立された釈尊独自の世界観・価値観・人生観に基づいてなされたものであって、すぐれて仏教的なものであったといえることができる。

(2009.4.23)